

## 歌に何を捧げるか 佐佐木頼綱

前回の続きだが、記念シンポジウムでは「二一〇年後の結社の形」も論じられた。現在の結社の形や紙媒体はいつまで持つか、持たせるべきか？ 幾つかの切り口で結社の未来予想図や現在の結社のメリットデメリットが論じられた。

私が結社に入っている(いつ入ったのかは不明だが)良かったと思っているのは、先輩歌人の背中を見られた事だ。祖母由幾や竹山広さんの葬儀で、私は「優しかったお婆ちゃん」ではなく心の花主宰で多くの弟子から慕われた歌人佐佐木由幾の姿を、「長崎を案内してくれた優しかったおじちゃん」ではなく原爆文学を遺し長崎から愛された歌人竹山広の姿を見せてもらった。太平洋戦争の前線に立つ兵士の思いで研究を続けたという信綱の手記、歌を支えに晩年を生きた鶴見和子氏の文章、余命を歌集を残すことに使った古川典子さんとのやり取り、花や鳥や歌が大好きだった住正代さんの生活、それらは私が短歌の価値を信じる背骨になってくれている。彼らと同じ雑誌に投稿し、後世に「心の花の系譜」という枠組みで見られることも嬉しく思っている。

実は独身の叔父が倒れ、彼を病院に担ぎ込んだ。信綱の事や短歌を教えてくれるとても近い存在だったのだが、いざ病院で入院手続きや保証人書類を書こうとしたら「六親等」にあたる私には何の権限もなかった。社会的には我々はほぼ他人だったらしい。私に

出来たのは区長宛の代筆申請書を書く事だけだった。「ああそんなに遠い人だったのか」と驚きつつ、短歌の価値観を共有する濃密さを感じた。僕としては彼は三々四親等くらいの意識だった。これを読んでくれているあなたと私も、血こそつながっていないが実は三々四親等程は気持ちがつながっているのだろう。

結社の長期的なメリットに我々は慣れてしまっているが、短期的な視点に立つと時間、労力、費用の面でデメリットも多い。無所属のパネリストからは「結社のメリットは月詠だけだ」という文章が引用された。結社離れが顕著である現状を見れば、多くの若者がそう思っている事が想像できる。情報流動性が高まり、時間や労力が金銭と同価値(もしかすると時間の方が価値が高い)になってゆくであろう未来、この傾向は更に高まるのだろう。

私はレジメに「心の花にいと婚期を逃す」という説がある」というジョークを記した。毎月の編集部で交わされるジョークなのだ。だが実際、週末を歌会や歌誌の編集校正、選歌、執筆、経理、批評会の予定と入れてゆき、更に自分の作歌時間を加えると、週末に行うべき掃除や散髪、友人や恋人との交友、家族団欒といった時間は最初に削られてゆく。一週、二週ならいいだろうが、数ヶ月、数年と週末を短歌に捧げた先にはどんな未来があるのだろうか。婚期を逃す、晩婚化する可能性もあるだろう。散らかった部屋は鬱の一因になる場合も多いようだ。

結社や歌に人生を捧げた人の文章や作品の輝きを見てきた。歌が晩年を充実させること、創作や研究に捧げなかった人の晩年が寂しい事も見てきた。作品でその人を見る見方に慣れてしまった僕らは、日常部分で良し悪しは論じにくい。でも家族との団欒はあなたの、そして誰かの命綱となっている事が多いから、手放さないで欲しいと思う。